句集　旅人木

序……佐藤念腹

南十字星……宮坂幾別春
女王花……斎藤信山
昼　蛙……林　貞逸
茶の花……岡本久江
春　眠……中村とし子
身のまはり……林　伊勢
移住……目黒白水
秋　晴……亀井杜雁
春の山……斎藤錦子
踏青……千本木瞑子
春景色……今出　均
稽古始……吉間大志
訪　日……目黒はるえ
掛乞……坂倉けん六
花野……羽瀬記代
春夏秋冬……梶本北民
草　笛……内山春一
草紅葉……井上蒼崖
コスモス……今出富代

空中根……増田恒河
パイネーラ……大熊星子
惜春……石塚冬鳥
夜の墾家……千本木早苗
浜椰子……上村静香
椰子の影……吉間かなえ
サビア……坂倉きみ子
春の貘……星野瞳
ユダを焼く……和山素描
パモンニヤ……牛田幸良
煙曇……西方耕一歩
白サビア……犬熊秋楓子
あとがき……斎藤信山

序文

サンパウロ市に居住する俳人は、今日夥しい数にのぼり、百を単位にして数へなければならぬと聞く。が、其中でも、花鳥諷詠を一途に信じ、住所を近くに持って、最も親しく明暮往来する三十一人が、よりより相談して拵えたのが此句集である。

従って此句集は何処までも仲よく、宮坂幾別春翁を始め、一人五十句づゝ載せてあるが、中には俳句を始めて三十年の人もあれば、二十年の人もあり、十年ぐらゐの人もあって、其俳歴は様々であるけれども、ブラジルの事実を詠み、実際を写してをる所に力があるのか、それぞれの伎倆と持味を、遺憾なく発揮してゐるのは誠に愉しい。

ブラジルを知らぬ人を誑かす、所謂輸出向き俳句といふのも、近頃は多くなった。此句集は元々、これに対抗したり、意識したりして拵えたものではない。が、此種の句に瞞着されぬためにも、出来るだけ広く読んで貰ひたいといふ願ひを、私は抱いてをるのである。

一九六八年九月一日　バウルー　草庵

佐藤念腹

南十字星

宮坂幾別春

本名　宮坂国人
生年　一八八九年七月
出身地　長野県諏訪市
渡伯　一九三三年三月
職業　銀行家

日本のラジオ始まり去年今年

日本着の母美しや初鏡

春着ぬげば忽ちわれは移民妻

兵一人タンポポの土堤に来て止る

日雇を招んで一座の雑煮かな

猩々花踊り衣裳の紅を奪ひ

この村は西班牙移民猩々花

呼寄の妻のはじめて見る山火

野火高きミナスの嶽の裾は雨

ジャカランダの落花を踏みて蓬ふことも

掃かであるイペの落花の五六片

榔子炭は壮快にして暖かき

浮世絵の女ばかりの春の夜

老たのし花歓喜樹を見て飽かず

訪伯の珍客来たる木蓚掘れ

正面にコルコバド見て夏館

木葡萄でおはじき遊び移民の子

鯉はねて夏の月夜の日本館

炎天や盆栽松はねぢ曲り

夏服を着て三男は恋をして

西日いま聖徒受難の壁画射る

鰐飛んで大渦巻の淵となる

ピラニアは別に飼はれて熱帯魚

アマゾンの河に突き出て夏座敷

ミナスの山険しと思ふ夕立晴

鉄山の亀裂の闇に飛ぶ螢

アマゾンに納涼舟など見当らず

スコールの川逆まに流れけり

河中に島現はれて雨期上る

日本より暖簾とり寄せ酢うまし

町の酢喰うて満腹老移民

増築に大シャボテンの列残る

歴史館出てカブラルの見たる月

仏蘭西の大使はピエロカーニバル

灯はリオを縁り湾の秋

まばたきをせぬトンボの目愁無く

明月に南十字はやゝ薄く

移り来て六十年の秋深し

空瓶の無表情なる夜の秋

盲には盲の世界ちちろ虫

草分の米寿めでたし柿の秋

百姓の声の太さよ朝の霜

朝霜のパラナ松原急ぎけり

ゴルフ場にスイナン一樹冬ぬくし

一筋の青を残せる干菜かな

難解の葡語の手紙よ日短

熱燗や寡婦とは云へどファゼンデラ

ポンチョ着て孫達並び冬めける

焚火して太古の心親しめり

寒燈にルカ伝のイエス死に給ふ

女王花

斎藤信山

本名　斎藤　幸
生年　一八九五年七月
出身地　長野県塩田町
渡伯　一九一八年七月
職業　銀行員

女王花の蕾上げたる年迎ふ

読初むアサイ句集の我が頁

女王花の刻々開く香りかな

月の出の遅き女王花咲き揃ふ

ガヂマルや登山電車の登り口

夕焼の貌上げて啼き交はす牛

山羊の髯てふ草のいきれかな

松蝉や黒猫といふ町生れ

レイ買うて連れにはぐれしカルナバル

マラリアのありとも見えず釣日和

いんぎんに行き会ふネグロ草虱

常緑といふ草好きで馬肥ゆる

馬肥ゆる農大内の一耕地

接吻けて開く聖書や僧の秋

豊作の奥地便りやパイネーラ

花蕎麦や原始林なき村となり

鳥渡る芋の地帯の大整地

再びの農機具展も秋日和

集い来しウルブに薬掘り止めぬ

蓑虫の松葉噛みゐる日和かな

跨ぎゆく露の径の椰子落葉

露深し探しと残り棉摘める

啄木鳥に残り棉摘む老一人

一と房の二キロの葡萄パラナより

一と株に一つの南瓜蔓もなく

旅人の木に寄り立てば秋の風

十年目の霜を恐るゝ寒さ来し

舟寄せてスイナン濃ゆき釣場かな

冬晴や蝶の影追ふ柵の鶏

草分けも一人となりし移民の日

水鳥や曇れば寄り照れば散り

菩提樹にかゝりて久し椰子落葉

日脚伸ぶ北欧風の高窓に

蟻塚も道の祠も脂肪草

但馬牛輸（い）れて春待つ耕主かな

火炎樹の花影に汲む泉かな

樹木の日とてブラジルの春立ちぬ

梅椿咲いて日本荘といふ

白蟻の塔をのこして野火走る

サラクラに潮満ちて来しマンゲかな

バルサ来る気配朧のロープ鳴る

北西風（ノロエステ）吹けば雨来と山を焼く

墾の灯に煙曇りの今日も暮れ

街路樹の霧藻にすがり巣立ちけり

蜂の巣や国宝となるタイパ塀

種蒔くやアフリカ蜂をやり過ごし

永住の許可下りし日の更衣

店頭に薬草いぶす薄暑かな

薫風や蛇樹を登る胸を張り

扉にもたせ塀に立てかけ聖樹売

昼蛙

林貞逸

本名林　貞一

生年　一八九六年三月

出身地　三重県桑名市

渡伯　一九二四年一二月

職業　商社員

青踏みし杖をゆづりて退院す

星飛ぶや窓を閉さぬ山療舎

ものの芽や神の子たらんと願ふ子等

商人に四月馬鹿なし電話聞く

大根市をぢさんと呼ぶわがことか

出水河添ひにわが飛機航くらしく

時雨来ぬ蒟蒻ゆでゝゐしところ

釣秋や島まで雇ふテコテコ機

麓なる冬菜畑より鷹翔ちぬ

我聾者子舟隻脚冬籠り

起重機の荷が上りゆく汗の顔

苗売りに肥料のことも聞いておく

裸の子貸ボート屋の客引か

波絶えて蟹取り舟の灯ぞ暗き

鯉の水深し夏杉影沈め

海原を泳ぐ金魚や走馬燈

料亭の提灯の画のきりぎりす

青蔦や門の鉄鷲錆びにけり

瓢の月糸瓜の闇と秋更けし

大根束ひきずり上げてバス発てり

偽れば白きその息濁るべし

畦踏んで腰落しけり大根馬

句碑の辺に煙り上りて冬木晴れ

椰子の実を割るや大涛うつ岩に

捨て馬の尾が叩きをる夏の草

箔剥げし神の御足に雨乞へる

空港の灯のはなやぎて時雨来し

草萌や大江ありて堤なく

囀りや風車の翼に一羽ゐて

四五人の男言葉の草刈女

バルエルの雲間に見ゆる芭蕉林

渡り鳥樹海かたむく彼方より

頂上や草に鳴きゐし秋の蝉

石橋の下一尺や春の水

尼の弾くギターに草の芽をどり出づ

草刈りの独り唄へる労働歌

布袋草道問はんにも人見えず

アラプーカ鳴かぬ囮のおかれあり

遠凪の浜の大きな焚火祭

産卵を終へし田螺に昼蛙

獅子が楯持てる紋章パイネーラ

親子牛柵に顎乗せ春待てる

春の風飛機尻上げて走り出づ

風船の売れたる一つ離れ行く

梨花の村十何キロを来過ぎたり

緑蔭の像の横顔秀でたる

蛇おのが脱ぎしころもをかへりみず

和酒よりも洋酒に馴れし年酒かな

芥焼く頭かゆしや木の葉髪

女婿追悼

これよりは温め酒もひとりかな

茶の花

岡本久江

本名　岡本久江
生年　一八九八年五月
出身地　奈良県天理市
渡伯　一九一九年三月
職業　茶業主婦

囀や茶山に摘娘出そろひて

ブラジレーラ茶摘の手甲掛けそろへ

（ブラジレーラ・ブラジル人女性）

雨晴れて港の積荷みな新茶

ブラジルの春は短し緑濃し

日脚伸ぶ日帰りの旅思ひ立ち

背き踏む友一段と声若し

芝に坐せば柳の糸の肩に触れ

春愁や旅にある娘のかげさして

母娘して招かれてあり春灯下

居眠りの婢に微笑みて春夜人

山本賞受けてわが家に春早し

新装備なりて新茶の揉み静か

朝かげの大王榔子に耕地古り

スコールの真只中にパナマ越ゆ

婢に小言云ふ愚さよ蝿たゝく

蘭手入れしてラテン語の名を覚え

椅子の上に団扇配りて客を待つ

母娘らしわれも母娘にバス涼し

虫干や要ゆるみし舞扇

雷か飛機か窓にひゞきて雨季暗し

浮世絵の団扇未だに色褪せず

椰子帽子かむる日も無く田舎発つ

駈け足にポン配りゆく夏時間

（パン）

暴落のバナナ残暑に積み重ね

夫の名の公園も出来涼みバス

日短かしとかこちて客にわろかりし

移民史は暗し秋灯明うして

爽やかな音よ厨に何刻む

舞の振り忘れて淋し秋扇

泣くまじと戻り来し門虫の鳴く

ぬぎ捨てゝ置き土産よと縞袷

訪日の名残稲刈る頃となり

身に入みて聴く君が代や移民　ミサ

秋探しふる郷のこと吾　娘のこと

転耕や四年の契長かりし

切株も失せてサビアの聴く哀し

アッサムの原木に未だ秋茶摘む

公邸の秋灯明るし叙勲者に

秋七草墨に描きて句にも詠む

露の世や二つ重なる訃の報せ

熨斗掛けで祝ふ金婚紅毛布

茶の花の盛る耕地に帰り来し

西欧の人と故郷の雪語る

焚火祭娘等は木綿の夜会服

明日の霜星の輝き見て知れり

百トンの寒肥おろす茶の畑

再渡日する娘に毛皮持たせけり

過ぎし日の霜をのがれてバナナ園

掃き清め洗ひ浄めて除夜を待つ

プレゼント聖樹のかげに積み重ね

春眠

中村とし子

本名　中村登志
生年　一八九九年三月
出身地　長野県上伊那郡
渡伯　一九一九年五月
職業　主婦

三代目の孫の誕生花珈琲

郵便夫畦火を踏んで近づける

春眠や畳の上の客となり

貸し馬の背にゐて買ひし榔子帽子

温泉の山は故郷に似て郭公鳴く

インジオの夜店々々の椰子細工

藤椅子や労働靴の足を組み

鰐の背にあたりし鍬や田をおこす

垂れ下る青きバナナに雨蛙

ポン一人乳瓶一人裸足の子

賄賂きかぬ毛見案外にやさしけれ

蛸掘りしと云ふ芋畑みてすぎし

春服やアクセサリーは金ぐさり

道端の柿売る店は萱たれて

新築の老人ホーム　パイネーラ

（パイネーラ・木の名）

木の葉髪きりっと巻けば気もしまり

銀河濃し　別れてゐれど息災に

赤ん坊の泣き声もして珈琲つみ

南瓜蒔く庭と畑の間かな

牛飲めば芹田の水は引けるかに

蒲公英や墓地に近づく　石だたみ

大男の神父と握手秋桜

着ぶくれて夜のみとりを引き受し

元旦の門に糞して放れ馬

ペリキット浜人足の肩に鳴き

（ペリキット・小型のオーム）

柚子浮び乳房浮びし昼の風呂

焚火祭顔を並べし放れ馬

蕎麦の花スラブ少女につひ蓬へず

放れ馬時雨電車に追はれ行く

ネグラ婢は数珠玉首輪　二重まき

四百年前の大砲汐まねき

イツペ新種十二輪づつの花の毯

（イッペ・木の名）

百歳にして釣り好きや　木の芽風

積み上げしジャツカ城壁となりにけり

（ジャツカ・果物の名）

舟虫や石垣は膝がしらほど

アラマンダ乞食屋敷と人云へる

桑の実や時に蜥蜴も口染めて

岩清水ヤコブの井戸を思ひ汲む

朝寒や客に来てゐて門を掃き

民謡と郷土なまりと新蕎麦と

天瓜粉仰向けの児の足にぎり

シュラスコの口をぬぐうて踊りけり

時雨るるや訓練の兵芝刈る兵

初髪に手を当てるポーズ若げなり

忘年会茶をついでゐし主婦踊る

寒肥の穴桑の根の黄色なる

冬仕度手伝ふ逗留となりにけり

奇妙な岩燈明上げて神の月

イツペーと大空のみのバスの窓

ミナス路や乾季の牛は砂舐めて

身のまはり

林伊勢

本名　林　伊勢
生年　一八九九年一一月
出身地　東京都日本橋
渡伯　一九二六年一一月
職業　主婦

虚子祀る虎ノ尾茂る句碑のもと

歓喜樹あり相思樹ありて園芽ぐむ

恋語る人に占められ路地朧

姑もまた大虚子贔屓虚子祀る

老二人うなづき合うて春情む

来合せてよそ目には吾も彼岸婆

見合とて古風にあらずさくら餅

パリの壷インカの面や春の塵

春寒や墓碑拝むごと句碑拝み

客我に厨の草餅見ゆるなり

スイナンの落花止めし浮葉かな

春雷やカナリア雛を踏みつぶし

デッキ這ふ厨の匂ひ夕焼くる

パナマ運河

船を曳く機関車八つ芝青々

叔母に聞く母の器量や土用干

色涼し描かれて行く山と湖

風鈴やこの路地三軒日本人

虫の闇探し夜の花開きつゝ

蝿打って人の心を知る日かな

外寝して彼等の不平耳にせり

羅や小山のやうな異人客

水槽の灯りて朱さす熱帯魚

金色の松藻逆立つ熱帯魚

熱帯魚鰭と見たるは髯なりし

サビア鳴くゴンサルベスの詩をうたはん

（サビア・鳥の名）

アラマンダ味噌漉干して井戸の屋根

メロン食ふ内助の功を遂げし人と

何をする　尼ぞ水着の娘等の中

日覆より出て向ふ見て　時計見て

カーザ・デ・バンデランテ

拓人は小柄なりしや徽のカマ

（カマ・ベット）

さゝやかな鮨　屋開けたる二人かな

乞食の銭なき帽に降る落葉

広告塔の天馬空駈け秋晴るゝ

啄木鳥や杣の道行くマスカツテ

（注・行商人のこと）

フアベーラに巡査来て居り秋出水

（注・貧民街）

耕車車庫乗用車庫柿たわゝ

貸馬が十頭あまり草の花

秋燕やミナス路近き山容チ

着せ申す合羽を打つて時雨来し

鱈買つて異教徒我も受難日を

病む人も看護も疲れちちろ鳴く

帰心矢の如しと便り銀河濃し

台風の近づく筏蟹遊ぶ

生涯をかくれ参りの墓一つ

荘守をねぎらひ帰る無月かな

コスモスや音楽一家画家一家

喜捨せしは労働者風慈善鍋

歩哨往き来蜜柑の皮があれば蹴り

鍋持っておでんを買ひに夜のコンデ

（注・日本人のおおい通りの名）

見るからに新来移民おでん食ふ

移住

目黒白夜

本名　目黒清一
生年　一九〇三年一月
出身地　福島県会津
渡伯　一九二九年七月
職業　銀行員（元農）

花道に榔子の花降る村芝居

花椰子や後生を托す移民寺

園の河馬大欠伸する口に東風

行く雁を仰ぐ四層の浜ホテル

たんぽゝに莫蓙の織娘等昼休

上ハ背で手効きの嫁よ袋掛け

袋掛く人工受精の花瓜に

我が心移りて耕馬黙々と

米不作無料配布の小麦蒔く

飛機で種播くとかや吾権兵衛蒔き

土地人を使ひこなして鍬始

土管より足裏みせし外寝人

塀も押し進まん構へ甲虫

落雷のあと只しげし雨の音

浚渫の泥両岸の夏柳

初乗りの飛機の真下の珈琲園

葡語ならぬ異国語睦む露台かな

冷奴週に一度の日本食

松葉杖投げ掃苔の碑にすがり

牛を売る値に開きありマンガ食ふ

（マンゴー）

農場に入るサイン乞ふ洗足の娘

太陽とサンバの国の椰子帽子

焼鶏の串立てならべビール飲む

カルナバル街ゆさぶって踊り来し

芥子ほめて邪教信者が日々通る

口はさむ隙を与へず毛見去りぬ

勤労の忍苦も詠じ秋燈下

虫鳴きて薪焚く汽車の長停車

乗り換へしノロエステ線秋暑し

銀漢やボリビヤまでの移民汽車

水仕終へ妻も良夜の馬柵により

日本と契約出来し棉を摘む

我も村を捨てし一人や秋の風

飛機で着く汽車無き町の天の川

新涼や旅の髯剃る紙サボン

（注・シャボン）

皇太子迎へてつゞく菊日和

拭き取れぬパラナポイラの柿を食ふ

山襞の霜枯れバナナおむつ干す

厨煙かゝる一と枝冬芽吹く

カボクロによくぞ馴らされ狩の犬

（注・土着の人）

蛇酒に怖ぢ玉子酒すゝめられ

シュラスコの興朗詠の俳諧師

移住祭吾も一人の開拓者

訪日を心に豹の毛皮買ふ

武蔵野の名残りの薮の山桜

古城址の空井戸渡る青嵐

萩芒囲む一基の墓詣づ

ブラジルと署名時雨るゝ落柿舎に

大いなる旅を戻りて年忘れ

秋晴

亀井杜雁

本名　亀井哲夫
生年　一九〇三年三月
出身地　熊本県益城郡
渡伯　一九二九年九月
職業　なし

眼帯をして昼夜なし春の雷

行春の盲の靴も磨かれし

見えぬ世と親しみながら春暖炉

春燈の下天井に近き席

見えぬ世のみな美しく囀れる

手の届く枝を想はせ囀れる

春雨の傘傾きし握手かな

はた目ほど不自由ならず杖うらゝ

空模様聞く度変り春寒し

踏めば鳴るたんぽぽの野に出たるらし

香水に腕をとられて招じられ

妻も読めぬ盲の日記年の暮

月涼し盲もうかと舗道まで

カニバルを遁れもならず見もならず

名も声も忘れし人と墓参

足の爪剪り過ぎたりな火取虫

曝書して盲の蔵書殖えもせず

見えぬより云へぬ焦立ち火取虫

ばら手入れする話など羨し

ばら盗られ見えぬ眼に角立つ思ひ

世に忘れらるゝ盲も年惜む

泣く子なき家に笑ひもなく端居

小説にならぬ人なし火取虫

目くばせは便利なりしよ端居して

端居せる盲に風の如く客

秋晴や手を取る妻と歩を合せ

階数へ上る盲に落し文

吟行の盲に虫の句が出来し

露の世や不幸と云へば皆不幸

破芭蕉弊衣破帽の風廃れ

秋晴に行く当てもなき靴を穿く

杖捨てゝ戻れさうなり秋の晴

秋晴と聞くだに嬉し人を待つ

秋の声盲ひても耳敏からず

冷やかな杖温かな妻の腕

我起居見られ放題秋の晴

新涼を南の窓に迎へけり

用談のなき客残る夜長かな

鶏頭に触れて方角誤たず

秋晴の気配盲の寝所まで

秋風や盲に遠慮ある言葉

秋晴を虚子晴と云ひ虚子祀る

虚子の忌に盲は一人きりでよし

稲妻や妻跪づげば吾もならひ

アマゾンの鰐も老いけん瓢骨忌

木兎鳴いて夜道は盲にも不気味

朝のミサ夜の読経瓢骨忌

不具故のひがみととられ冬籠り

君も亦着ぶくれしとぞ背たゝけば

落葉我靴を離れぬまゝ四五歩

春の山

斎藤錦子

本名　斉藤銀子
生年　一九〇六年八月
出身地　秋田県角間川町
渡伯　一九二三年一二月
職業　主婦

山荘の窓の高さに春の山

枕べのレモン一個や春の旅

春日傘わが行く方へ牛が来る

山笑ふ五日泊りに飽きし温泉に

つきまとふ蛇に疲れし仔犬鳴く

句碑除幕見に踏む芝もあたゝかく

遠野火に蜂流れ来る厨窓

春昼や蝶の眠りを蝶覚し

洋裁の看板藤の窓に張り

皮むいてやれば咲くなり猫柳

猿が来て煙り曇りの窓叩く

葱坊主風にさからふ蛇一つ

春寒や胸に吸ひつく聴診器

クリスマス雪降らぬ国雨続く

クリスマス鐘の玩具のオルゴール

むせびつつはなさぬ乳房天瓜粉

暑に負けし仔熊助ける術なしと

朝焼や踏み場なきまで土間に蟻

白靴や近づき来たる撒水車

日焼して化粧も出来ぬ勤かな

夏痩せて汽車では行かれ相もなく

夏草の土手にはびこる牛蒡かな

アトリエの椅子に涼しくかけて聞く

足もとを離れぬ犬や蚊喰鳥

毛虫焼く隣の留守をたしかめて

尼寮の耳門開けある大暑かな

止り木を噛んで暑さに堪ふオーム

蛇の衣かかりて薯の花ざかり

草取を手伝ふゴムの手袋し

流れ来るダマダノイチの香に長湯

（花の名）

薫風や鼻を撫でれば馬笑ふ

明易き貨車の積荷に寝る工夫

大火蛾をこはがる子猫抱いてやる

打水の先をころがりゆく蝶よ

虹消えて蛇の踊りの笛たゝむ

犬小屋を踏台にしてゴヤバもぐ

よく変るバス終点や霧の町

温泉に入る診断を受く紅葉宿

石積んで交通止めやクワレヅマ

念腹庵訪ふや虚子忌の秋晴に

（花の咲く灌木）

蓑虫の蓑出来秋もふかみゆく

コスモスの揺るゝ二色とらへ剪る

秋耕や午後を手伝ふ女たち

膝の傷見せに来る子や草の花

柿の樹もありて家賃も高からず

日脚伸ぶ客も電話もホ句の友

蔦サンジョン憩へば足の豆痛く

（蔦草の名）

突き目してより恐しき珈琲採り

母の日や孫もキッスをしに来たる

踏青

千本木溟人

千本木繁人

本名　千本木繁人

生年　一九〇七年五月

出身地　新潟県長岡市

渡伯　一九三七年、一〇月

職業　銀行員（農業技師）

信じ得ざることのおこれり青き踏む

君の手のあたゝかなりし　青き踏む

青き踏む揃へ呉れたる木靴穿き

ゆるやかに春水巻きて鯉返る

強東風に乗せ牧草の種を蒔く

仔馬呼ぶ飼槽叩き柵を打ち

九時に打つ耕地の寝鐘遠蛙

土人等の楽器の音色暖し

春塵の卓を拭いては火酒を売る

決めきらぬ二つの心日脚伸ぶ

先輩の墓を洗うて大志あり

うなづけば大きく揺れて椰子帽子

水盗人言葉やさしくすれ違ふ

水盗む人とは知らで声かけし

漂へるもの皆鰐でありにけり

夕燐を戻り来る機に旗を振る

アラマンダ白しと見れば月登り

避暑地より日焼もなくて戻られし

日覆を巻いて花屋の灯がともり

リオの灯の見ゆるパケタの涼み馬車

（海岸の名）

火を焚いて野良着を干して梅雨長し

みな裸長男次男三男と

追はれ行く西瓜盗人の裸かな

舟虫を迫って岩飛ぶねずみあり

露涼し今日牛放つ牧を見に

旗たてゝ病院船や雨季の河

蛇酒に暑気を払うて老移民

花の蜜吸ふ蜂鳥の逆立ちて

ビール飲む卓へ富くじ売りに来し

妻よりも母である日々明易し

水打って年々太るトルコ店

吊床の用意北への旅なれば

一粒の籾に穀象押し合へる

処女林や丈なして咲く秋の草

投縄を引ずって牛霧に消ゆ

朝よりタベ濃しとや柿紅葉

あたゝかきポン買ふ夜学戻りかな

（パン）

夜なべ妻句も考へて居るらしく

今日よりは南半球の銀河かな

水澄みぬ矢を射て魚を獲るといふ

その昔栄えしとのみ月の島

山は眠り荘の壁炉はよく燃えて

年ほどに老けて淋しき木の葉髪

今日も母を帰さぬつもり蒲団干す

帰化せんと思うて久し毛布干す

毛布（パンチョ）被て焚火祭りのその一人

脈打てる如く炭火のほかほかと

木の叉の落葉十枚ほどありぬ

春景色

今出均

本名　今出　均
生年　一九〇七年九月
出身地　和歌山県新宮市
渡伯　一九三〇年六月
職業　銀行員

囀や園深く来て返すバス

畑小屋を何時巣立ちしや蜂雀

猫好きの一家に迷ひ子猫また

東風はらむ天幕の市の明けにけり

頂上の風荒くとも春景色

春泥を嫌ふ孔雀は木の枝に

春の泥流なくとも家鴨飼ひ

元日やサクラ倶楽部の飾り海老

マンジー滝ドラード滝と釣り移る

茄子漬に箸ををさめて茶をすゝる

二日早やインフレつのる紙幣数ふ

師走人かき分け逃げて掬摸なりし

鐘打って鯉に投餌や黄睡蓮

衛兵に日傘さしかけ話しをり

赤潮や岸に釣るるは河　豚ばかり

金銀の鈴振り分けてミサ涼し

サングラス花嫁移民らし五人

銃眼にかゝる蜘蛛の巣新しき

毒蛇喰ふ蛇は無毒の蛇と知る

蛇を見るモダンな橋のかかりゐし

明易し畜産展の牛が啼く

熱帯魚死に絶え鎧魚ひそむ

麦刈機双翼あげて向き変る

移民史も五十五年の鮨の宿

貝塚に根を下したるマモン熟る

（パパイヤ）

舟虫や浮桟橋は日々に古り

暗き灯は監獄島か夜光虫

垣の菊リオにふえたる日本人

フアベーラの子等ユダ打って荒々し

起重機にユダ吊られある受難節

敗戦組入れぬ相撲の木戸を守る

パイネーラワシントンより花便り

カボクロの手搗きなれども今年米

（土着の人）

流燈や月は昇れど江暗く

惜別の句会燕の帰る日に

鳴き渡る鳥金色に仰がるる

鳥渡る潮汲む風車翼休め

貝塚をうごめき出でし大蝸牛

銀バスは湯の町行きや秋涼し

マンジューバ引く網近く鱸はね

（しらうおに似た小魚）

花の鎌倉露のバウルー今日虚子忌

夕時雨繁華な街を巡るバス

スイナンや史跡は有りのままがよし

吹雪草散りそめ祭り月終る

手術妻腹一杯に咳きたしと

北伯の捕鯨基地南伯の鮪基地

甘蔗汽車甘蔗粕焚く太煙

火曜日の朝市安し大根買ふ

空缶を叩けば仔豚刈田より

象ケ丘鼻の先まで花野かな

（地名・令腹が住んでいる町）

稽古始

吉間大志

本名　吉間重一
生年　一九〇八年二月
出身地　兵庫県神戸市
渡伯　一九四一年三月
職業　製薬会社技師

坐礼して異国に稽古始めかな

武骨老技末だ老いず寒稽古

書を胸に当てゝ暗誦大試験

春昼や塀の据掻く野の鼠

春眠や寝返へれば見ゆ泣き黒子

春昼を精密天秤振れ止まず

日雇のもめに朝寝を起されて

初ミサやノイバとなりし娘を連れて

（婚約）

苺ジャム戸棚に鍵は針箱に

図書室の窓の高さを行く日傘

稽古着のまゝ昼寝して弟子を待つ

甚平被て移民に稀な浪花人

裸子を抱けば冷たく健かに

犬小舎に仔犬木蔭に親寝ねて

杖（ベンガラ）と云ふパンを小脇に初夏の朝

（フランスパンの長いタイプ）

コーラスのあとのお喋べり葛饅頭

消えて行くネオンのニュース夏の雨

緑蔭に建国の家塗り替へて

グラジオラスアラブ料理の生の肉

乗り捨てし馬は草喰み娘は泳ぐ

衣更へ紺のセビロは教師めき

アスファルト切れて戻りし撒水車

滴りの玉落ち沈む草深し

稲妻やリオ空港は海に沿ひ

延びて行く爪彩りて蟹サボテン

爪先を揃へて咲ける木沓蘭

外食の味気なささよ葡語夜学

師も弟子も志立つ夜学かな

芋の葉の露靴にしむ夜勤かな

カンテラを提げて夜勤や月見草

国境と云ふ語身にしむ旅の宿

足跡を鹿と知る村塾の児等

楽聖の生まれし邑や虫すだく

混血の孫に童話や柿むいて

フェジョアーダ持て余したり　冬の蝿

（料理名）

夫婦して見せ合ふ俳句寒弛む

試験室出て散髪や日脚のぶ

トランプを好まぬ次男餅を焼く

暗諭んずる農場三訓事務始め

大桶のふちを捗りて煤払ふ

サントス海苔　バストスそばよ年を越す

（ともに地名）

恋に生く王の日記や暖炉燃ゆ

正面の大洞窟や冬日和

根深汁煮えて実験室昼餉

通ひ婢に従いてゆく犬日脚のぶ

占へるシガナの指の蜜柑の香

（ジプシー）

日脚のぶ日毎片づく干桶場

国ぶりをこの地に伝へ寒造り

焚火映えサイロはお伽の城のごと

セルタネージャの唄転耕を笑うかに

訪日

目黒はるえ

本名　目黒はるえ
生年　一九〇八年四月
出身地　福島県会津
渡伯　一九二九年七月

グヮデマラの寒風旅愁を奪ひけり

夏潮や戦のあとの日本船

椿寿忌の供華を大事に旅重ね

再会の師にとびつきぬ花曇

紅梅やブラジルの火酒提げて訪ふ

ブラジルの秘薬を分ち花に酌む

訪ふ家も訪ふ家も種選して

豪雪に傾きし塀梅白し

この家の雪沓一つ女もの

ストーヴや藁仕事など今はなし

獅子舞や旧家の主九十歳

梅早し城址の茶店ほつほつと

みちのくの乗りつぐ汽車も花林檎

間の延びし吾が里言葉草の餅

夜の銀座夜の新宿の春灯

春眠や日本一と言うホテル

突貫工事弾丸道路花人に

チューリップ修学旅行新潟へ

師の句碑へ行っては撮りて春惜む

走り来て中学服が苗投ぐる

四五日に越後平野は田植すみ

半年を寝食ひの村に粽巻く

老鶯や起きぬけの温泉へ水うめる

山の温泉はどこも混浴蝉時雨

浴衣着て横坐りするほかはなし

病院の延命地蔵夏深し

隣室の訃に耳を掩ふ明易し

五色湖はまことと五色に枯尾花

粟林出る娘が呉れし粟十粒

乳倉の子畦に這ひ出し稲を刈る

公卿に学びし父祖の硯を洗ひけり

コスモスや竹細工する家らしく

落柿舎の渋柿豆の如小さく

二十ほど嵯峨野の薮の烏瓜

枯菊に重ね重ねて萩も焚き

虫時雨夜更しの灯に笠深く

菊育て苦労のかげもなき移民

春灯下稗搗節を上品に

赤子抱く探険隊像秋深し

啄木鳥や買ひしは落葉深かき山

明易や地球の裏へはや帰伯

夏草や踏む貝塚の貝崩れ

燃えあがる夜振火島の灯は暗し

灯を消せる天幕めがけて蝎（さそり）跳ぶ

開拓の夢の悲しき毛布かな

天高しブラジル人と子等誇り

狐火やみな旧移民顔をして

夜学子に戦ふ国の地図を指す

採掘機据ゑ宝石の山眠る

青き踏み土牢へ花摘んで投ぐ

掛乞

坂倉けん六

本名　坂倉〇（千に力）六
生年　一九〇八年四月
出身地　東京都四谷区
渡伯　一九二八年一月
職業　商業

掛乞うて臥床の主婦と視線合ふ

掛乞ふや吾が靴ふめる土間の犬

へつらひに耳かたむけず掛を乞ふ

パイナ飛ぶ男盛りを日雇に

（喬木の名。　綿毛が飛ぶ）

水鳥の目の赤き二羽相寄らず

陵を守る兵士の像も時雨けり

冬空に剣かざす像将と兵

破れ芭蕉古き轆轤と牛車

遠山も吾が買ふ山もクワレズマ

（花をつける灌木）

鍾打って花野に飼へる蜂を呼ぶ

草紅葉マットに残る夏の花

（森あるいは野原）

猩々花人の見る程貧ならず

秋燕黍殻を焼く島の畠

南雀忌修す花野の福博寺

天高し育ち良き馬牧に群れ

太き薪二つに割れば秋の声

遠野火や腹減りし子等　母を待つ

秋蝉や移民寺にも参り来し

弱き妻はげまして又転耕す

新藁に腰掛けて抜く指のとげ

立飲の火酒一ミルや秋の雨

絶壁の下に亀浮く秋の海

カンテラを振って牛呼ぶ牧出水

花茄子や土を丸めて運ぶ蜂

青蛙鳴いて山霧雨となる

フランボヤン読人知らぬ小島の詩

夜の秋の人形に見る女房ぶり

夏草や遺跡の話皆哀し

鳳凰花船つき近き馬車溜まり

クロトンや島のホテルの抱へ馬車

夜振火に　さかのぼる魚突きまくる

干草や国道までの通り雨

蛇衣をぬぐ青芝のぬれて居り

囚はれの顔突こんで草刈れる

娘の墓の天使の像やアマリリス

日雇の髭を生せる裸かな

水草や家鴨の足の下の鯉

夜濯の水に見るみる落ちる火蛾

蟹買って夜のバルサの人となる

（渡し船）

ガジマルの広場に夜の馬車雇ふ

夏帽や念腹先生リオに在り

耳までもかぶさる彼の夏帽子

ビヤホール出て乗る真夜のバルサかな

池守の小屋の庇の鳥おどし

春草を食む鴨の嘴へらの如

草餅や移民着きたる夜の耕地

啓蟄や世に問ふ窯に　火を入るゝ

木葡萄を含みて老の頬佗し

野火赤し淋しき人等火酒あふり

虚子祀る師も兄弟子も皆移民

花野

羽瀬記代

本名　羽瀬喜代

生年　一九〇八年一〇月

出身地　大分県豊後

渡佰　一九二八年十月

職業　主婦

茶室開きせしは昨日よ春の雨

鏡台に向きて眼が覚め水中花

熱帯魚眺める椅子に洋酒酌む

蝶を迫ひ蝶に越されて花野ゆく

旅宿の早き目覚めに小鳥来る

春暖炉うつろの心とり戻し

夕蝉や旅の一日の忙しなく

飛石の一つ大きく庭落葉

花火買ふパリーの橋と云ふもあり

日溜りに雪なき国の吹雪草

拾ひ読む歌の模様の旅浴衣

土産物買ふ店頭の浴衣客

菊の庭今日は歌人等来てをりし

徒然に落葉焚く日を重ねけり

寒燈に夜毎の祈り怠らず

ジャズ高音闘魚妖しく光りけり

みつ豆やサロンの上の中二階

去年の事なほまざまざと螢とぶ

灰皿に少し燃せし蚊遣かな

砂舟の棹の重さよ夕とんぼ

春光や指輪のひすゐ影を置き

今日は犬誰にも吠えずアラマンダ

彼の紳士信じてよきやカルナバル

百頓の寒肥すみし茶山とか

墓拝む孫の名の百合咲いてをり

蝮酒すゝめられたる夏山家

啄木鳥や植物園の冠木門

夜の秋や旅愁も少し煙草喫む

寒菊や母亡きあとの仏守る

反省の時今我に青き踏む

鳳凰樹荷を曳くも亦駿馬なる

落葉掃く夫に従がふ吾となり

もの思ふ人に従きゆく夜霧濃し

冬山を重ねトンネル幾つ経し

目雇に呉れし椰子帽新らしき

試みし新種の出来の棉を摘む

桃の花バスより車掌投げ手紙

鍾乳洞近し冬山相迫り

大根に寄るは邦人朝市場

鉱山を視るミナス路やイペー咲く

（ミナス州）

螢追ふ顔寄せ合へば髪匂ふ

騎り入れて渡る浅瀬の　夕ほたる

干草の山出来てゆく雲の峯

木造の二階の宿の秋蚊かな

砂日傘海辺の土地を売る出店

日本間は八畳一間蚊遣焚く

風鈴や盲ひし人に夕づける

夏深し温冷浴の砂時計

居続かぬ女中にかまど猫は老い

春夏秋冬

梶本北民

本名　梶本明
生年　一九〇九年一一月
本籍　広島県宇品
出生地　北米加州桑港
渡伯　一九二七年五月
職業　印刷業

赤塗りの消火器納庫スイトピー

春日影宝石展の廻り廊

囀りの乱れて暁の雨少し

独立祭この浦里の鼓笛隊

山笑ふ十九世紀の駅時計

クローバのバッチを胸に大選挙

たんぽゝや赤と緑の牽引車

夢の浦貝の浜辺や春の海

春窮の老眼鏡をためし合ひ

春雷や看護の母のほつれ髪

惜春やはきよき古き靴磨く

春の灯や団欒の間の父母の額

惜春の別れの握手再びす

宿を借る野火と山火の　移民小屋

藻の花や池に横たふ人魚像

聖体を受けし子祝ふメロン切る

日本の夏靴夏帽再渡伯

ダムとなる滝茶屋淋し網あめる

飛魚や古き戦利の移民船

長じたる子等はそれぞれ年忘

遠浅や足裏につく夜光虫

白扇や男子詠じゝ歌一首

緑蔭やタオルを携げて温泉の客

藤椅子　足の先よりのぼる月

石筍の生れんとして滴れる

空色のオランダ風車夏館

コルションの草刈るスザノ平かな

（地名）

欠席二人出席五人初句会

ジャボチカバ熟れて空地の塀高き

（ブドウに似た実がなる）

読み返へす十大ニュース去年今年

曲り家にして二階建柿若葉

濡れて行くピエロよ雨のカンナバル

ホイセ振る眼に飛び当る朝の露

（農具）

わが書架の那須の植物秋灯下

師の白髪も噂の一つホ句の秋

宵闇や節電の燈とびとびに

虫の灯に辞世の文字の大きさよ

アポロ像雄大壮大秋の天

書屋の人庭に立つ人秋日和

聞くも一人語るも一人秋灯下

ジヤツカ稔る庭の奥なる志士の家

貝塚に立つ空なしさよ秋の風

洞窟に憩ふ樵や冬木立

水道の源にして鴛鴦の湖

燃えさしのほだ火にヨハネ祭明くる

海霧こめし夜の港のチンドン屋

（注・ケントン屋の誤植）（生姜酒の屋台）

黒ずみし大笊小笊牡蠣運ぶ

ココ椰子の南バイヤへ山を見に

新しきビル街古き冬木立

箒目の落葉に楽譜思ひけり

草笛

内山春一

本名　内山春一

生年　一九一〇年一月

出身地　山口県吉敷郡

渡伯　一九三一年六月

職業　印刷業

春の月潮にぬれて女神像

手を逃げし風船パルケの月へ飛ぶ

（公園・遊園地）

切りし木の地ひゞきに蛇穴を出づ

春灯の窓に貌のせ去なぬ牛

ゴヤス路に入る夜のバスや春の雷

まだ海苔を採るには早き海を航く

巣立ちたる駝鳥に一樹なき野かな

別れ霜オンドル焚いて雛と寝る

ジヤカランダバイア胡弓の唄かなし

（花をつける灌木）

脂肪草岩に乗りたる牧の小屋

（カッピン・ゴルドーラのこと）

背負ひたる子にも野良帽春の風

春の夜半悪阻の狆に薬煮る

切株を巣立ちし鳥に一樹なし

マンジューバ舟待つ明けの魚市場

パパガイオさわがし壁の守宮落つ

（オーム）

初ミサに騎馬七頭の一家着く

くつがへりさうな浮巣や舟過ぎぬ

草笛を吹いて異国をあこがるる

軒なみにお得意先や水見舞

鏡餅航海日誌供へあり

月涼し壁画の船は帆を張って

草いきれシガナの生活見て過ぎぬ

（ジプシー）

病人に嘘云ふかなし蝿を追ふ

読初や近代美術印刷集

蛇たぐり寄せて園丁芝刈れる

出水引く辻早やシュラスコ屋の煙

インジオの土間の乳倉の子も裸

刷初や極暑の紙のちゞみつゝ

夜の蝿舞ふやたかぶる熱帯魚

慈善鍋吊り替へ士官交代す

病葉を散らして夜鳴する雀

馬騎りのギターに袋掛の唄

夜霧濃し逢ってはならぬ人と居て

メーデーや美男揃ひの菜葉服

畝の砂吹いてもどりし放屁虫

長子家になじまぬかなしメロン切る

水汲みに舟寄す島のパイネイラ

（花の咲く灌木）

夜業して家出の兄をなつかしむ

籠の鳥水浴び散らし菊日和

大パラナ松一本の花野かな

（パラナ州）

秋草に淋しき旅を娘と二人

山腹の家歓喜樹の上の家

二の小屋の飛白乾きの懸煙草

稲妻の馬車を酔眼閉ぢて馭す

母の歩に合せ母の日暮れんとす

八合目まで珈琲園冬の山

暖炉焚く主婦のギターの唄つゞき

避寒地の朝温泉に騎馬で着く人等

猿は樹に抱き合ひ園丁落葉掃く

鍾乳洞の宮殿に入る頬かむり

草紅葉

井上蒼崖

本名　井上一応
生年　一九一〇年八月
出身地　福岡県朝倉村
渡伯　一九二八年七月
職業　商業

中空にある煙突や春の月

摘草を投込む籠の倒れけり

よき鞍の乗捨て馬よ花マンガ

（マンゴー）

糞詰る馬看てをれず種蒔きに

バス終点にして園の門イペーザ

（ピンクの花のイペー樹）

放れ馬庭に来てゐる野火明り

テアトロの岐阜提灯や春の宵

旧街道登りつめたる霞かな

凧の尾の今日も来てゐる空気浴

ガス吹いて発たぬ襤褸バス　ジャカランダ

（紫の花をつける灌木）

盃百合咲いて徳利椰子の庭

昼寝して療養日課怠らず

旅に発つ親娘の握手朝涼し

日焼けして新入患者軽からず

退屈な客に昼寝をすゝめをり

ビール注ぐコップの高さ尺ほどに

引く潮に残されて蟹小走りに

木耳の中の鼠の耳といふ

鞍解くや米撞蛍とぶ牧に

夕蝉や終点のバス空で発つ

珈琲園の木耳なりともてなされ

紫陽花や貸馬溜り馬車溜り

馬槽も厩も古りぬプレゼビオ

蛇の毒吐かせてをりし人輪かな

バウルの暑気払ひとて温泉に　来たり

ブラジルを滅法褒めて大裸

月下美　人今宵にかぎり客もなし

（地名）

拓士髯裸になれば似合ふなり

花野ゆく大八に似し牛車

濯場の土の階段あかのまゝ

日曜ごとに少し遅るゝ種を採る

ペンギンを歩かす鰯浜に投げ

借金を重ねし棉根抜いてをり

日本酒の酔ひ心地賞で柿とらず

十一時までの留守居やちちろ虫

新米や電気竈もおろしたて

日本の話きりなし秋団扇

麻州男セアラ女を恋ひ棉摘める

〈麻州・マット・グロッソ州。セアラ・州の名〉

蕎麦の花マテ茶の山を越えてより

竜胆や身の上話聞いて泣く

少しびっこ引けば楽なり草紅葉

別院の法主迎へし盆踊り

貝塚へ露払ひといふ櫂を振り

ピニォン降るパラナ路に見しカルゲイロ

時雨るゝや鉦打って魚投げ売れる

人参引くモンペはしかと日本人

シュラスコに背負って来たる手風琴

風邪声の笑ってばかりをられけり

粗朶積んで避寒の宿の大サロン

鯉を呼ぶ吊鐘とかや枯柳

コスモス

今出冨代

本名　今出冨代
生年　一九一一年五月
出身地　和歌山県新宮市
渡伯　一九三〇年六月
職業　主婦

移民宿の明治の時計壷の菊

蓑虫の蓑に走れる緑かな

妃の陵に燃えて雨月の　香炉かな

コスモス揺れ君のパイプの煙ゆれ

コスモスや母似と云はれ母知らず

州境と云ふも秋風吹くばかり

人形に見る義理と恋秋灯下

手紙ぎらひの妻何書くや火取虫

浮世絵の遊女に今宵火蛾狂ふ

ボヤーダの宿借る牧も大乾季

（牛群の移動）

姪圭子眸涼しき尼となり

夜の秋や遺作かゝげし四方の壁

目覚にさきがけ目覚め明易し

短夜や沖持ちをして移民船

軽るがると深井汲む娘や韮の花

闇汁の餅を鳴り出し小鈴かな

山眠り野に狂人等耕せる

猫に買ふ玩具の鼠クリスマス

手毬唄忘れし妻に夫つゞけ

仄かなる緑の芯や月見草

春燈下インジオの斧の重たさよ

肩借りて養生歩き春の草

口笛は少女でありし波止朧

花マンガ移民の握手かたかりし

夜遊びの猫の布団の春の泥

朝寝たのし日曜の娘の弾くピアノ

春愁や街の人出の中に居て

春燈へ妻のび上り針かざし

珈琲の花の明りの戻り馬車

駝鳥巣立つ野に開拓の鍬を打つ

惜春の心畳に坐り居り

花マンガ奴隷の掘りし古き濠

逝く春の乙女の部屋の糸車

母に似し我が性かなし泣き始め

短命な妻の家系や更衣

泣き初の額のこぶの目出度さよ

日本間は移民の奢り夕端居

鳳凰樹二人づゝ乗る島の馬車

売上の昨日にまさる日覆巻く

夕立を逃げおほせたる鞍を解く

空中根

増田恒河

本名　増田秀一
生年　一九一一年八月
出身地　徳島県小松島市
渡伯　一九二九年一二月
職業　事務員

オーロ・プレット

坂多し古寺院多し春の蝉

貰ひ来し田舎の土のもの芽かな

啼きながら仔牛来る道草霞む

十ばかり残れる墓や鳥交る

礁海苔を採る命綱腰に巻き

椰子並木一本欠けてイペー咲く

茶の里の小さき山の花珈琲

朧夜の空に時間を書くネオン

春潮や寄添ひ泳ぐ夫婦亀

沖の岩沈まぬ日あり春の潮

カイサラの子の凧競ふ海の上

（海辺の土着の人）

寿灯下インカの土器の女笑む

初日記横書なればホ句もまた

群牛の波打てる背に初日出

夕立中自動車停りて人降りず

落雷や「神の指(テレゾ・ポリス)」てふ峯震ふ

遅蒔と遅々蒔の喜雨の稲

フィゲイラの空中根の露涼し

蟹料理港の夜景ほしいまゝ

蟹売れず石蹴をして売子たち

蚊柱や荷受始まる野菜市

花活けてより現れし毛虫かな

病葉の舞ひをさめたり池の面

舷を叩きて蛇を近づけじ

赤屋根の尖り青麦波打てる

移民の子軍刀受けて卒業す

アベニーダ・ブラジルが好き新樹好き

（ブラジル大通り）

スコールの熱き一粒頬打ちし

浜木綿や海へ海へと蝶の群

去ぬ燕国境までは人棲まず

廃屋に攻入りし草末枯るゝ

山も川も鉄の色して末枯るゝ

馬肥ゆるミナスに名ある年の市

日の帽の黄葉は散らず　紅葉散る

朝顔と坊やに訣れ出勤す

昼顔や牛と馬には低き柵

霧の中霧より白き滝かゝる

顔映るガラス扉押して霧へ出る

霧霧るゝ英国風の駅時計

母の日や子を見せに来し姉妹

ホ句のほか遺るものなし虚子祀る

蛇の如く野をすべる汽車鷹一羽

群かもめ浜シュラスコに来て去らず

枯蔓やインジオ攻めし砦跡

枯蔦や尖りし屋根の煙だし

枯野描く画架倒さんとする風よ

牧牛の群に突入る枯野バス

馬つなぐボテキンの柵神の旗

（屋台風飲み屋）

戦時中二句

日本語を話せば罪や瓢骨忌

ラジオ聞けず新聞もなく日向ぼこ

パイネーラ

大熊星子

本名　大熊峯喜

生年　一九一三年三月
出身地　福岡県朝倉村
渡伯　一九三六年八月
職業　洗染業

火酒酌んで淋しむ移民パイネーラ

（灌木の名）

牛船に手かざす娼婦江の秋

中流の舟に牛鳴く良夜かな

降りたるは難民ばかり露の駅

泣かぬ夜の枕を濡らす洗ひ髪

捨て扇青年移民発ちし宿

露深しとて貸しくれし裸馬

燕居ずなりし土手舞ふ群れアヌー

（カラスより小型の黒い鳥）

屋根に来て鳴く水鳥や月の雨

秋天下皇子に祝辞の国人泣く

（宮坂国人）

啄木鳥の鉄の木を打つ音ならん

珈琲採る最中に母国訪うて来し

人形の女房ぶりや秋袷

プレセビオの灯明りいざり来て　坐る

（キリスト降誕の情景人形。クリスマスに飾る）

インヂオに撞かせし今年米と云ふ

熟爛に酔ひたる彼も明治恋ふ

涸湖の遠くに舟の溜り居り

貧に強く寒さに弱くピンガ飲む

処女林の王なりし樹や冬の庭

島々の牡蠣買ふ船に乗って来し

島々のマンゲの牡蠣も採り尽し

インバウバ林貧しき冬山家

（再生林におおい灌木）

アマゾンの支流の支流とて涸るゝ

移民祭劇の斧打つ木屑飛ぶ

移民妻砂蚤にまた悲しめり

襟巻を取れば風ある部屋の中

借金をして店開けて日短か

干肉の蝿が来初めし日向ぼこ

牛肉の刺身のあとの根深汁

毛糸編むローソク持ちと云ふ役目

蛇除けの帽とて脱がず木下闇

毛虫焼く火に飛ぶ鳥の如き蝶

泥の泡ふつふつと鰐目ざめをり

日盛りを来し息荒く火　酒飲めり

夜の新樹陸の燈に来る海の鳥

注げば濁るアラブの火酒や暑気払ひ

見送りもなく発つ飛機の中の蝿

夕虹や屋根なき廃墟壁高く

火焔樹や小さき町の大伽藍

夏蕨柔かかりし移民宿

派手な恋しながら老いてばらが好き

碧眼の色読みがたし濃紫陽花

トルコ店とて値切りしに団扇呉れ

床下の豚にも蚊遣して来しと

チラピアの池とて田螺おびたゞし

（東南アジア原産の淡水魚）

田螺釣る驢馬の尻毛を抜いて来し

カイサラの子等の蛤笛あはれ

（海辺に土着する住民）

豚買ひのジープに春の泥深し

トマテ運なかりし借地別れ霜

草の芽や吸殻消えて煙のこり

惜春

石塚冬鳥

本名　石塚定雄
生年　一九十三年三月
出身地　群馬県新田町
波伯　一九三三年六月
職業　銀行員

掛け馴れし椅子を離れず春惜む

耕して娶らず嫁かぬ兄妹

遠野火の音夜となれば研して

十二頭立ての牛車に春の泥

朝寝していま炊く米を撞いてをり

春風に轡のいらぬ馬飛ばし

火に焼いてプラカチンガの種を蒔く

苗床に残されしもの蔓伸ばし

炎天下唐黍伸びる音なりし

馬の振る尾の風うけて　駅者昼寝

大火蛾に墾の夕駒の灯　は小さし

舟に生れ舟の暮しや夜光虫

真直な道真直な椰子並木

蔓の水コップに満てり木下闇

湖中の切株に釣る裸かな

昼寝時間と見たり静かな街を行く

絵むしろを吊って土耳古の店なりし

斧始火酒一本の山の宴

蚊喰鳥舞ひ出し斧をしまひけり

パモニア売口動かすは噛み煙草

（青トウモロコシを蒸したもの）

夏の雨太き樹雫傘を打つ

兵営の町とや雨の鳳凰樹

鳳凰樹建ちつぐビルに囲まれぬ

雁瘡の足に土塗る湯治かな

紫陽花やイギリス村の騎馬の娘等

神の墓仏の墓や墓参

冬去ればすぐ夏の国更衣

対岸の見えぬ大江キャンプ張る

珈琲園の一本道の競馬かな

育つ月身体によしと外寝せる

初刷や新大統領は年若く

麦の穂を軒端にバイア料理店

鍬だこと別に珈琲摘のたこ

我が行手人佇つ如し稲光

肉にフォーク菊膾には箸添へて

飢餓移民と言はれて落穂拾はざる

秋耕や高原にして山を見ず

秋雲の影棉畑に来れば濃し

赤松の肌の秋日を懐しむ

鯉池に佇めば刺す秋の蝿

黒き岩割れば真白秋の山

穴まどひ町中と云へど気をつけよ

日本語で問はんか芦に釣る人に

砂蚤の足噛んで冬ぬくき犬

長身のなほ地を擦れる長マント

初霜や古着を乞　ひに来るコロノ

（農場労働者）

砂地よりテーラロッシヤに霜深し

（赤土）

章魚ポンプ二つ相打ち日脚伸ぶ

他州より来て冬の日に焼けし顔

刑場の跡の寺とや夕時雨

夜の墾家

千本木早苗

本名　千本木苗子
生年　一九十三年五月
出身地　鹿児島県国分市
渡伯　一九三六年一〇月
職業　主婦

婚約の彼に花種分ちやる

小説を読めば食べたし桜餅

さかしまに天井あるく蜂の恋

恋猫の月に逃げゆく追はなくに

夜の墾家ラポーザの恋猫の恋

（キツネ）

産箱が気に人らぬ猫入りては出

黄イツペー学校の町古き町

芽柳や片側町として栄え

ぽきぽきと棘をむしりてばら芽接ぐ

嫁ぐ日の幾度か延びし蚕飼かな

春燈がまぶしくて嘘つきし子よ

雨乞や蝋燭さゝげ嬰児抱き

花マンガ咲きつぎて早や太き実も

（マンゴー）

片隅に植ゑたる悔や藤の花

ナタールも過ぎ七面鳥の親子無事

（クリスマス）

ビロードのはな緒に蚤の光り居り

うしろ髪見る手鏡に蚊のとぺる

外寝する夜も深まれば蚊もをらず

仰向きし毛虫の腹に毛はなかり

立話す都会の隅の昼の蚊よ

街路（ルア）越えて我が家にまでも大木蔭

闘魚の子螢の如く草に乗り

市中につばめの家として空けてあり

血ぶくれの蚊の飛び来り櫛で打つ

靴の紐結んで昼寝あきらめし

狂ひたる目ざまし鳴りて昼寝覚む

朝々の野菜畑への道をしへ

首飾欲りて二タ歳クリスマス

蜘蛛の毒　犬も一夜を泣き明かす

一日の雨に胡瓜の太りすぎ

パラグワイ女洗足で踊る花茨

派手に見ゆカフスボタンは木の実なる

月光の洩り鰯雲目のあらき

まだ名なき句会なれども虚子祀る

一念は通ずるものか天高し

このあたりクワレズマ低くつつじに似

包紙の字のうつりたる酒の粕

まろき舌見ゆれど鸚鵡もの言はず

赤い靴がうれしく猫と日向ぼこ

始めたらあとへは引けぬ毛糸編む

煮擬やいまだめとらず才たけて

フランネル父の見立てもあなどれず

咳すればビオロンが鳴るソフワーかな

いくばくもなきにわが庭バロン落つ

（火風船）

落つる日のしばし止る枯木中

初便り雪にたはむれゐる写真

逃げ来しか地に嘴開けて寒雀

冬庭に炊煙の影あがりけり

焦げぐせのつきたる鍋や冬の雨

水鳥の首を伸べつつ雌を追ふ

浜椰子

上村静香

本名　上村　静
生年　一九一三年一〇月
出身地　北海道札幌市
渡伯　一九三三年三月
職業　主婦

バウルーとはツピー語なりカジュー熟る

（師の念腹の住む町）（カカオ）

玉子洒意地悪さうな眉となり

玉子酒楽しく酔へるとはこれか

浜椰子に車乗り入れ水着着る

寺の鐘霧の塔より唄となり

祭典の花舗の玻璃戸の白椿

イペー落花女子大生の憩ふ芝

水草生ふ古りて良き庭よき主

暖炉燃ゆ王子の如く眠る孫

造り滝水を落せばサビヤ来る

色白き玉藻の句友花あやめ

エプロンをはづせば元日暮れんとす

虫干と云ふほどもなし牧柵に

蓑虫の恐しきほど蓑よろひ

岸の草出水引くより花つけて

啓蟄や土くれ押して長き髭

深霧の市場に支那語高々と

夜濯も月夜だけする日雇等

乗初の豆汽車走るパルケかな

（公園・遊園地）

琴弾けば二世が笑ふ春燈下

弾き初やジャズひく娘たしなめて

二世等は焼唐黍にバター付けて

童謡のレコード掛けて和語夜学

百合活けし客間に欠伸かみ殺し

片陰の切れし手庇して行きぬ

行く春や園のアララに話かけ

（大型のオーム）

天高し減食しても太るらし

重さうな木の実の腕輪細き腕

春灯や還暦男ボーロ切る

（ケーキ）

蔦紅葉聖母の額の見ゆる窓

その色を着てもみたしや花あやめ

紙コップ拾てる車窓の春の草

秋灯下新しき辞書英字多し

浜の砂まだ温く嶋の灯涼し

夜着きし移民幼き子の多く

闘はん気配鶏頭相対す

サツシーと云ふ名の突風春の夜を

朝寒の物乞コーヒ欲しと云ふ

街中に野鳥の声や明易き

大根を引くにも月の占を

毛糸編む聖市の寒さ恐れつつ

コーラスの顔揃ふまで毛糸編む

いつの間に吾れを包みし夜霧ゆく

短日や借家に移り落着かず

野火の穂の長きがさびし夜に入れば

社会鍋士官の瞳蒼く澄み

野の花と木の実がブラジリヤの土産

榔子の影

吉間かなえ

本名　吉間のぶ
生年　一九一五年一〇月
出身地　兵庫県神戸市
渡伯　一九四一年三月
職業　主婦

朝寝して葡語の売声聞き分けて

ハイヒールはつまづき易し春の泥

うらゝかや我も異国の観光客

葡語まぜて話すが易しイペの花

街中にサビヤを聞きし朝寝覚む

（小鳥の名）

花珈琲　見廻る馬車にノイバ乗せ

（婚約者）

タンポポや仔犬と孫がつきまとひ

芽柳やわが乗るバスは川向ひ

鼻つまむ程の事なし放屁虫

七色にサボン泡立ち水温む

（シャボン）

濯女の去りたる石に椰子の影

貌上げて風を嗅ぎゐる檻の鰐

近く鳴くサビア木莵庭に熟れ

門涼み親しみ合ふも葡語貧し

香水やワルツ始まる刻せまる

日本蚊帳吊る寝台を寄せにけり

コーラスに来俳句に来風薫る

涼風を入れて始めし掃除かな

ドア開けて風鈴に風入れにけり

犬の貌抱いてとかげの穴を守る

土間に来し大きな犬や稲光

山路は赤土白土女郎花

ブラジルの柿も見せんと卓に置き

靴音は門を入らず虫の声

俳人も帰化する多し鳥渡る

永住となりしブラジル柿の郷

よき息子ありて耕地は秋の晴

熱帯樹立並びつゝ秋深む

厨事すめば鳴き出てちゝろ虫

吾児病めば小鳥の来るを待たれけり

月光の洩れる舞台の幕開きし

用なさぬ道しるべとなり落葉積む

怠けぐせつきしと思ふ日向ぼこ

福引運ある子を連れて買物へ

ワルツ弾けば皆踊りてクリスマス

書初や師の句についで夫の句も

三味線も古りしと思ひ初稽古

よく揚る凧に濯ぎの手をかざす

模擬店におでんあるとて拡声機

毛皮着て異人に嫁ぐ娘の式へ

サン・ジョンの花火揚りて旅の街

（聖人の名、その祭日）

母の日も母の手料理食べに来る

枯木山降りねばならぬ急な坂

酒飲まぬ六十年の年忘れ

風に馬もたけりて戻り道

住みなれし枯野の道を間違へし

毛糸編む口ずさむ唄はブラジル語

山眠る火星近づく日なりとか

押売りの葡語に首ふり日短

蒲団しまふ押入れ欲しと思ひ住む

サビア

坂倉きみ子

本名　坂倉きみ子
生年　一九一七年八月
出身地　山口県大島郡
渡伯　一九三一年六月
職業　主婦

囀りや砦に似たる山の茶屋

強東風に逆ひて打つ鍬重し

セキセイの囀りしきり雨しきり

耕や戦火をくゞり来し夫と

棒蒔きは吾が種蒔機より速し

田螺の巣嫁に教へて姑逝けり

春風や長子娶りて家業継ぐ

啓蟄の蟻一つづつ乗る浮葉

温室の高窓より入る木の芽風

墓洗ふ黒輝石のトルコ文字

四人とも後手をしてバラに佇つ

落ゴヤバふぐり無き豚太りそむ

（果物の名）

蛇衣をぬぐ苦しみよ緋合歓咲く

面白や百発百中蝿叩

カイサラの娘も来て唄ふ夜のキャンプ

（海辺に古くから住む人）

日除して百メートルの大鶏舎

胡瓜もみ四十人の句宿して

大会につぐ小句会明け易し

遠サビア緑蔭に聞く師の俳話

夏料理いつも涼しき主婦の顔

避暑の宿雨の一日の夏炉焚く

兵営の新樹明りに面会す

教練の汗の新兵二十人

荒壁に椰子帽五つ鍬五丁

油虫打ちそんじたる顔に飛び

夜光虫港の風はなまぬるき

コルドンの七百人のニグロかな

（綱）

半巻のアメリカ簾風に鳴る

秋灯下子守人形顔そむけ

柿紅葉藁屋に住みて大地主

秋蝉の鳴きやみし句座風通る

鐘打って月の運河に渡舟発つ

椰子壁は穴あき易し秋出水

凶作や娘売られし如嫁ぎ

ブラジルの虫太し声また太し

秋冷の指欠け地蔵撫でて見る

芋飯を大山盛りにもてなされ

夢の浜月夜の貝は泣くとかや

額の柿紅し笊の柿紅し

秋冷の指欠け地蔵鼻も欠け

大学の残りの菊にスト続く

日を吸ひし蜜柑ぬくゝて甘かりし

物売のきんきん声の息白し

養老院の池のほとりの冬菜畑

古き句碑新しき胸像丘小春

おでんやの恋女房は新移民

火炎樹や画廊も有りて温泉の　ホテル

サントレイス鶏提げて待つ村の長

日を吸ひし毛布は羽根の如軽し

新幹事新会場や初句会

春の貘

星野瞳

本名　星野　明
生年　一九一八年七月
出身地　島根県松江市
渡伯　一九三〇年二月
職業　輸入商に務む

夜更かしの塒の灯に来て春の貘

雨乞やペンニヤに古き雨の神

（地名）

ブラジリアを夢にまで見て転耕す

開拓を助けてくれし馬も肥ゆ

棟上げの餅撒きこむや花珈琲

珈琲の葉笛を吹いて新移民

移民はやブラジル風邪に注射打ち

満月の雨降って来て乾季果づ

秋晴れのそのまま夜となりし空

春泥の椅子の脚にもつく日かな

囀りの籠さげて行く見舞かな

ニグロ等に伝はる唄を聴く焚火

父母の墓洗礼親と来て拝む

耳輪穴開け植痘瘡もしてくれし

子供の日につぐ教師の日兎生る

異人等に交じれば小さや根木打つ

新米でありし夕餉を帰り来ず

船長に注がれて日本ビール飲む

アマゾンの浮世話を聞くビール

インジオの弓矢を破魔矢として飾る

枝の日の榔子の葉露のうちにとる

難き世の吾等にイエス復活す

しろがねの聖樹に灯す黄金の燭

滴りのこの断崖に建つホテル

落ちて釆る太き木の葉に風立ちぬ

猩々花仲良き垣にして高し

秋入日蜘蛛の一緯にからまりぬ

賞の菊口笛吹いて驚けり

蜂の巣の吾が神経に太りをり

炭火いま金殿玉楼なせるかな

天井の我が影動き暖炉燃ゆ

石の相時にやさしく冬日濃し

灯を返す塵の如きも熱帯魚

街音を消化してをり冷房器

インフレの品売って飲むビールかな

サンパウロ・ビエナール展にて　二句

鉄斎を日焼の面に観て飽かず

香水やフランス廊で又逢ひぬ

キャンプ村一の美男が通るとて

虚子の忌に奥地より来し父に逢ふ

秋日ふと女の口の中を見ぬ

眼の細き鼻の低きも涼しけれ

耳に紅さして巻きたる夏の髪

春月に光る口紅ぬりて来し

春愁や聖書にもある恋の詩

異人とて吾が春愁を解すべし

暑気払ふ露程の火酒妻も飲み

団扇風汝の体臭時に嗅ぐ

汝一人の寝台の如き朝寝顔

汝が寝息かゝり春眠覚めにけり

ユダを焼く

和山素描

本名　和山一三美
生年　一九二一年三月
出身地　北海道夕張郡
渡伯　一九三二年八月
職業　歯科技工師

野火暮るる仔を呼んで牛柵去らず

葱坊主韮は刈られてあ りにけり

山吹や踊 り稽古のモヂの娘等

（地名）

虚子の句　碑北向にして暖かし

（南半球のため）

恋簀の踏　み倒したる杣の小屋

青き灯に神々の影プレゼビオ

一ト月のブラジル日焼して居たり

夏の灯や夜を恐れぬリオ女

吟行の人のみ残り青き踏む

春雷やアパートに飼ふ犬吠えて

ナタールのロテリヤを買ふ組募る

（クリスマス）（富くじ）

椰子の花奴隷の母を讃へる像

火蛾払ふ結ひ立ての髪匂ひけり

倒れ木に沿うて並びて蟻地獄

乳しぼる樹の中なる新樹かな

帰省子の日本語恋しと云ふ哀れ

商人も農家には客メロン切る

妻や娘の握りし鮨を句座に盛る

引汐のマングゞ離るゝ蟹を見し

日本船出て行き雲の峰残る

虚子祀るきびしき写生きびしき師

柿を売る駅に日系兵と下車

カンナバル女を叩く槌を買ふ

カンナバルヱレベータにも足拍子

新幹事の働きぶりや初句会

アラマンダいつも汽車待つこのベンチ

ジャボチカバ奴隷の森と云ふ史蹟

ポロン明り彼の夜業の灯なるべし

（半地下室）

星飛ぶや黙って歩るく兄弟

猿酒に酔ひしインヂオまだ覚めず

棒立の悼馬に乗りて霧に発つ

榔子の実を売るバイヤーナ声も良く

（バイヤ州の女）

君の犬吾を慕ひ来墓参道

焼ミーリョ　コルコバートの階に買ふ

（トウモロコシ）（リオのキリスト像の丘）

日本恋ふ沖縄の舞移民祭

我が恋に花火を上げて焚火祭

寄宿舎の規則変りし冬支度

白き雲夜空にとんで寒さ来る

美容食は腹減るものや日短

駅の水飲みに来る牛牧乾季

冬蝶の翔つ薪舟にとんと乗る

しぐれ来る聞耳立てゝ犬の像

こがらしや電柱にある電話鳴る

馬で来る赤手袋のポ語教師

煙曇椰子小屋も町の一戸かな

棉穀火暮れるマットに騒ぐ鳥

幕張つて復活祭のセー広場　　㊫

ユダ焼くや棒を手にして見て居りぬ

ユダ焼けてしまひし白き煙かな

パモンニヤ

牛田幸良

本名　牛田　魁（スグル）
生年　一九二一年九月
出身地　静岡県静岡市
渡伯　一九三五年一二月
職業　クリーニング業

ウバイア酒に酔ひしもスザノ春寒し

庭造る岩寄せてあり桃の花

春雷や盲人夜の刻を聞く

囀りや切手の市と古銭市

草闘牛肝入役の年長者

仙人掌の砂丘暮れゆく茜かな

夫朝寝児を叱る妻声ひそめ

滝のぼる魚影に弓つがへけり

星座の名覚えし児等と外寝かな

この辺りしかと羽瀬邸夏木立

白靴やニグロばかりのクラブとか

地に埋めてビール冷してあるとかや

夏草や湖まで柵のなき牧場

蝙蝠や洞の深さ誰も知らず

干瓢乾す二竿三竿移民寺

日本語のミッサデガーロ拝しけり

黒猫の額の裏より守宮出づ

熱帯魚支那祝言の席決まる

一と息に冷しマテ茶の大コップ

献燈の浮き灯心の涼しさよ

カイサラの洗足詣や島祠

味噌の蓋外れかけたり転耕車

放し飼ふ園の孔雀の羽抜かな

老いてより良き夫良き妻　花茗荷

百本の中の一本男柿

パモンニヤ胸やけする程食はずとも

黄昏の園は昼より秋探し

鬼灯や土民の妻を少女とも

爪きり器投げて返すや日向ぼこ

嗅ぎ煙草試して嚔しきりなる

生炭の煙なりけり駅バール

（売店）

湯豆腐や厄を落せし義兄弟

水鳥の抜毛浮藻に花の如

桟橋より一キロ程も湖涸れし

色街の焚火祭に酔うて来し

おでん屋の常客らしき二世達

アパレシーダ詣とてバス百余り

（有名寺院のある町）

寒林の廃屋こぼれ日もさゝず

咳けど鍾乳洞は研せず

狐火やマンゲ林の貝塚に

温泉に入る列なりし着ぶくれて

聖灰を黒きひたひに白々と

三博士の一人黒奴やプレゼビオ

（クリスマスに設置する生誕風景）

カニバルや耐久バイレの三昼夜

（ダンスパーテー）

カニバルや　異人とばかり踊る娘よ

日本よりの信者なりとや四旬節

吾が家は一汁一菜受難節

枢機卿あげる歌　ミサマリア月

暁の工場の汽笛甘蔗刈る

煙曇

西方耕一歩

本名　西方正夫
生年　一九二四年八月
出身地　群馬県伊勢崎市
渡伯　一九三三年八月
職業　印刷業

馬車止めて落ち来るバロン待ちにけり

（火風船）

味噌搗くやコロノ時代に痩せし父母

（農場労働者）

入口に墓地ある耕地移民着く

移民船異国の豪華船の間に

カジュー吸うて慣れぬ食事の落着きぬ

（果物の名）

垣繕ふ老に毬投げはじまりぬ

土曜日は日本風呂の干菜湯に

殺虫剤汚れの服をぬぎ憩ふ

落葉径ダム番人の鶏あそぶ

博物館より冬かすむ町も見し

土曜日曜遊んで月曜日短か

雨季に入る空を日雇等と仰ぐ

かはほりや言葉交せば火酒くさく

日曜の暇ひまに建つ家に雨季

寒波来るは噂ばかりか桃咲ける

大霜をおどろく大きな日本語

放し飼ふ鷺の一羽が藤椅子に

クリスマスカード売場におされ来し

アバカシを数へ終へたる軍手ぬぐ

（パイナップル）

禿鷹が南瓜の苗を踏み歩く

お通夜を明易きとは云へ一人で居

畑荒らす山羊の逃げ行く秋の雨

カルナバル戻りの一人ポン買へる

（パン）

パン馬車も乳馬車も草刈り居る野

ジュワの実を毒と教へに来し土民

ゴム落葉一ト馬車に積み余りけり

日時計へ行く飛石や春の芝

値上がりしポン買ふ人等朝曇

初髪に馬車馳すレンソかぶりけり

（スカーフ）

カニバルに踏み荒されし芝手入れ

新茶くむ父母には固き　菓子なりき

テレビ撮る光の中のカルナバル

冬耕のトラクター町の客を乗せ

独立祭国旗の緑樹々の緑

独立祭終る軍楽隊に従き

売り急ぐ独立祭の国旗かな

パイナ吹く駅の乗客皆牧夫

道新樹昼の物売夜の物売

我が州に近づく椰子林バナナ林

（灌木の名）

昼霧や屋根のとがれる山ホテル

百四十人の虚子忌の移民の句

百余ある牧草は穂に試験場

我が土地に住む日近づく煙曇

脂肪草の匂ふ夜風に汽車を待つ

種蒔を済まさむランプ提げ来たる

熱帯魚狙ふ白鷺今日も来し

鳳凰樹事務所も社宅も皆タイパ

沼杉の大木下闇小下闇

カイサラの町に日焼けもせず住めり

かはほりの群れとぶマンゲ潮満ち来

白サビア

大熊秋楓子

本名　大熊朱利

生年　一九二六年一二月

出身地　福岡県朝倉村

渡伯　一九三六年八月

職業　洗染業

供華流す舟に水鳥来て舞へり

涸沼を豚積んで馬車通るなり

タツー穴塞ぎて珈琲摘み落す

（アルマジロ）

豚市や禿應ありく港町

のど自慢の選に落ちたる風邪寝かな

狐火と云へば笑ひぬ馬車の客

とび上がる大きな月や貘の恋

泥水を巻いて行く船河涸る る

借りて着るマント重たし冬の雨

アデマルに投票して焼藷を買ふ

（候補者の名）

冬凪や燕飛びして河雀

冬山家窓に東洋人の顔

老姉妹育ちし家よ暖炉よと

拡げ持つ地図を囲めり落ち葉中

豚買等南瓜の山も買ひ占めし

土間の猫吾が擲てる火蛾を食ふ

庇なきボテキンの戸に虹仰ぐ

（屋台風飲み屋）

フアベーラに詩人健在パイネーラ

（灌木の名）

裸馬に芒の鞭や月の原

菊供へ仏前結婚二世吾

末枯や色の変りし山蜥蜴

夜業してサラリオミニモ悲しけれ

豚舎守る灯に鳴く山羊や受難節

（法定の最低給料）

胸像はしかめっ面して木の実落つ

油虫家賃四倍にはね上がる

昼寝して居るシガーナの馬車なりし

（ジプシー）

夕端居牛の背に乗る牧の月

白服を着て人使ひあらあらし

ヨットの娘犬にも着せて浮袋

火炎樹に来て高鳴くは海の鳥

カニバルの鬼面を取って靴みがく

アマゾンの苗木ばかりを売る店よ

足かけし倒れ木沈む夜振かな

岩に坐せば夏山の蝿人をさす

蟻地獄祠の蛇の通りけり

狩集め来し日雇と鍬始

柿落花病鶏を焼く穴深く

ビル蔭の打ち倒れ来る簾かな

花海芋踏んで馬丁等馬洗ふ

生れたる仔馬に朝日とび上り

南聖や白サビア聞く旅一と日

（小鳥の名）

春燈の画廊の女画の女

山草を抱く植疱瘡の列の子よ

手組まねばつれなき如し春の月

馬を積み新米を積む飛機なりし

氷屑運河に投げて鰯売る

葉をたたむ蝶々の木や秋の暮

小屋に病む犬にも着せて狩衣

夜業夫妻の夜なべの灯に戻る

あとがき

この句集「旅人木」は明治百年と渡伯日本移民六十年を記念するため、サンパウロ市に於ける俳句同好の仲間三十一名が、永年作句して来たものの内から各自五十句づゝ出し合って編輯したものである。

吾々三十一名は、現在サンパウロ市内で色々な職業にたづさはって居り、年齢層にも三十五、六歳の壮年から八十歳の高齢者に至る開きがあり、又鴛鴦七組を含めて十余名の女流が加はつて居るといふ混合体であるが、かつては奥地のファゼンダ（農場）又は植民地で、例外なく移民生活の苦難を身に泌みて味はって来た人ばかりである。而もそういう環境の中で、念腹先生から花鳥諷詠の指導を受け、かつ又母国の正しいホトトギス俳句を学びながら、木蔭句会、芹句会、木曜会などに席を置いて、毎月の例会で欠かさず顔を合せる親しい仲間である。

然しながら、その俳歴に於いては、渡伯後に習ひ初め

た者ばかりであって、年数こそ十年乃至三十年内外の作句を続けて来て居るが、ここに収録した句は各自精一杯のものを選出したものであることは申す迄もなく、そして、凡て念腹先生の選を受けたものであるけれども、決して之を公表して世に問ふなどと大外れた野心を以て刊行したものでないことを特記したい。

排列の順席は、協議の結果年齢順としたので、鴛鴦組が自然分れて了つたのは残念であるが万止むを得なかった。又各自五十句の排列とその標題は夫々の好みによつたものであるが、その何れをとつて見ても、永いブラジル生活の経験と感興が裏附けとなって居らないものはなく、そこに私共一同の移民六十年記念句集を刊行して永年勉強して来たお互ひの努力と、養はれた趣味を披歴し合ふと云ふ念願が叶へられておれば幸ひである。

本句集の印刷と装本については、御多忙中の星野立子先生を煩はし、また校正その他刊行上の手配などは

玉藻発行所の野村久雄氏に面倒を見て頂き、その結果このやうな立派な句集を発刊して頂いたことに対し心からお礼を申し上げる次第である。

尚、序文は特に念腹先生から書いて頂いたもの、見返しの「スイナンの花」は久江さんから、又扉絵の「開拓者の像」は恒河さんから又題字は貞逸さんからと夫々畢生の腕を振って描いて頂いたもので、何れも本句集の錦上の花として生涯の記念となるべく、更に句集の立案から刊行に至るまで句稿の整理、立子先生との交渉、会計事務などを担当して頂いた幹事、けん六、浜子、均諸君の惜しまぬ御努力に対して、一同の名に於いて厚く感謝の意を表したい。

（一九六八年八月　信山記）